

8 大学全体の図書等の資料及び図書館

8 大学全体の図書等の資料および図書館

(1) 近畿大学図書館の概要

近畿大学の図書館は、本部キャンパスに所在する中央図書館（以下中央館という）と本部キャンパス以外の学部にある分館としての各学部図書館から構成されている。

中央館では法学部・商経学部・理工学部・薬学部・文芸学部の5学部とこれに直結した大学院各研究科、教養部、教職教育部、併設の短期大学部、および原子力研究所ほか8つの研究所と本部電算機センター・共同利用センター・語学センター・留学生センターなどの併設施設の図書等の資料を集中的に取り扱っている。

上記の学部の内、理工学部と薬学部には中央館の分室として理工分室と薬学分室を置き、主として理工分室では化学分野を除く理学分野と工学分野の学術雑誌を、また、薬学分室では薬学分野と理工学分野のうち化学分野の学術雑誌を中心に、学部の壁を越えた教員および院生の研究活動の利便を考慮して、学術雑誌の共有・共用化を進めている。また、文芸学部は本部キャンパスから府道を挟んで離れた位置にあるため、平成12年から新たに文芸分室を設けることになった。法学部、商経学部、教養部などには学部資料室があり、使用頻度の高い資料類を重点的に配置している。

中央館の分館として、大阪狭山市に医学部図書館、奈良市に農学部図書館、和歌山県に生物理工学部図書館、広島県の東広島市と呉市に工学部図書館、福岡県に九州工学部図書館がある。

これら学部図書館、分室、資料室の状況については、それぞれの学部の自己点検報告書に詳しく記述されている。

なお、数値については別表を参照されたい。

(2) 図書等の整備について

ア. 現状の説明と点検・評価

a. 蔵書冊数

中央館の蔵書冊数は、別表①のとおり和書で約60万冊 洋書で約59万冊 計約119万冊である。他の学部図書館では和書35万冊（平均7万冊）、洋書20万冊（平均4万冊）、大学全体では和書95万冊、洋書79万冊 総計174万冊となる。中央館の119万冊は、同規模私立大学の平均95万冊に比べて多く、また、洋書の占める比率も他の大学に比べて高いということがいえる。これは、社会科学系の二学部が長年にわたって洋書を精力的に収集してきたことと、医学部における洋書の比率が高いことが要因と思われる。

広島工学部の蔵書数が他の学部に比べて多いのは呉・東広島の二つの校舎に分蔵しているものの合算数であるためである。生物理工学部は創設間もないので蓄積された蔵書は少ない。これを学生1人当たりの蔵書冊数でみると、別冊の「大学本部および各学部編」に記載されているように、中央館は49冊 農学部36冊 医学部136冊 生物理工学部23冊 工学部69冊 九州工学部53冊 大学全体では51冊となり、同規模私大平均値よりも少ない。

※（注）私大平均は、日本図書館協会の年次調査結果（1999年実績）による。

b. 年間受入冊数

図書の年間受入冊数は、別表②のとおり中央館で和書 24,182 冊 洋書で 7,990 冊 計 32,172 冊、これに対し学部図書館の合計は和書 9,255 冊 (平均 1,851 冊) 全体で和書 33,437 冊 洋書 12,442 冊 計 45,879 冊であり、中央館では私大平均よりも多いが、大学全体でみると少ない。特に洋書の購入比率は低くなっている。学生 1 人当たりの年間受入冊数は、別冊の「大学本部および各学部編」にあるように寄贈図書も含め中央館 1.3 冊 農学部 0.7 冊 医学部 3.0 冊 生物理工学部 1.5 冊 工学部 1.3 冊 九州工学部 1.4 冊 全体では 1.3 冊となり、私大平均の約半分であるが、特に農学部の数字は極めて低く、また中央館の場合は学生数が多いので学生 1 人当たりの年間受入冊数になると私大平均と比較すると極めて少いのが目立つ結果となる。

これは ウ. 問題点と改善方策 で説明するように、従来の予算制度の欠陥から教育用図書の体系的、量的な収集が不十分な体制であったことによるところが大きいので、今後図書の収集とその充実にあたっては精力的な努力をしなければならないと認識している。

c. 学術雑誌の所蔵数

学術雑誌の所蔵種類数は、別表③のとおり中央館では和雑誌 4,753 種 洋雑誌 6,144 種 計 10,897 種、学部図書館で和雑誌 3,443 種 (平均約 690 種) 洋雑誌 3,435 種 (同約 690 種)、計 6,878 種 (同約 1,380 種)、大学全体で和雑誌 8,196 種 洋雑誌 9,579 種 計 17,775 種である。

中央館は私大平均とほぼ同程度であるが、全体では特に和雑誌が少ない。これは本学の学部構成として理工系学部が多いことによるものと思われる。また、生物理工学部が少ないのは創設後まだ日が浅いことによるもので、前述の蔵書数と同じ理由によるものである。

d. 学術雑誌の年間受入数

学術雑誌の年間受入種類数は、別表④のとおり中央館で和雑誌 1,460 種 洋雑誌 1,601 種 計 3,061 種、学部図書館の和雑誌 1,971 種 (平均 394 種) 洋雑誌 1,208 種 (同 242 種) 計 3,179 種 (同 636 種)、大学全体で和雑誌 3,432 種、洋雑誌 2,809 種、計 6,241 種である。これは私大平均より和・洋雑誌とも 約 1/2 程度少ない。近年の洋雑誌の高騰により購入タイトル数が著しく減少するなかで、中央館では和・洋雑誌とも前年より増加を図るべく懸命の努力をしているところである。

e. 新聞の受入数

新聞の年間受入数は、全体で 157 紙であり、日本語 137 紙、外国語 34 紙である。特に各都道府県の地方新聞を幅広く収集している。

f. 視聴覚資料数

視聴覚資料は、別表⑤のとおり中央館で 25,344 種、学部図書館で 2,764 種 (平均 553 種)、全体でも 28,108 種と量的には少ない。特に各学部図書館での所蔵数が著しく少ないのが目立つ。

g. 図書資料費

図書資料費総額は、別表⑥のとおり中央館で約 4 億 2 千万円、大学全体で約 7 億円であり、これに、個人研究費・事務用図書費を含めると、中央館 5 億円、全体で 8 億円となる。これは昨年に比べ、中央館で 5,000 万円、全体で 6,000 万円の増額となり、学術雑誌の購入費高

騰に対処した結果である。学生1人当たりの資料費は、中央館では平成6年に1万4,000円が10年度1万6,000円に増額しているものの、私大平均の2万4,000円と比較してかなり開きがある。

イ. 長 所

蔵書冊数が比較的に多いといえる。ここ近年は諸事情から図書の購入が量的に減少しているが、昭和50年代に蔵書の充実を目指して精力的に収集した成果と思われる。蔵書内容も社会科学系の教員研究用の資料がかなり充実しており、また蔵書構成のうえで洋書の比率が高いのは前述した経緯があるにしても、かなり精力的に収集された成果である。

新聞については、各都道府県の地方新聞を幅広く取り揃えているのが、他の大学図書館に見られない特色である。これは地方出身学生が多いために郷里の情報がきめ細かく入手できるようにとの配慮から、中央館のオープン時からの収集方針であり、これまで関係各方面から高い評価を受けている。

また、蔵書のうち、重点収集を行っているものに地方史・地誌の類がある。東京の書店に委託して、古書・新刊を問わず未所蔵のものを積極的に収集している。西日本地域は町村レベルまで、その他は市レベルまでを収集の対象にしており、学外の研究者からも注目されているもので本学の特色ある蔵書である。

貴重書等のコレクションは、過去10数年前までに精力的に収集したものが集積して、現在5,500点(6,100冊)に達し、内容的にも他大学等に誇れるものを数多く所蔵しており、中には世界的に貴重な図書や日本近世医学史上貴重な外科道具類もある。本年これらの貴重書を適切な環境のもとで保存・活用するための整備事業を予定しており、整備完了後は貴重書として保存するだけでなく、授業に直結した幅広い活用を積極的に展開することになっている。

ウ. 問題点と改善方策

a. 蔵書構成・年間受入冊数等

蔵書構成のうち、学生教育用図書の量的な不充分さに加えて、新刊図書の充実を希望する学生の強い要請は、ここ数年の収書方法のひずみの現れである。また、学生からは専門書だけでなく、一般教養的な図書をはじめ軽い読み物についても購入希望が出てきている。

図書の年間受入冊数、ことに学生1人当たりの受入冊数と学生1人当たりの資料費が少ない問題については、次のbで述べる予算制度の変更と選書システムの改善などにより、徐々に改善の効果が現れるものと期待している。

図書の購入整備に関しては、個人研究費による図書の購入が図書館の管轄外で行われているという現実があり問題点と考えられる。先のア-g. 図書資料費で述べたように、その金額は大学全体では約1億円の規模になり、教員の研究用図書はこれでほぼ充足されている一面がみられる。このため、教員からは図書資料購入に関する要望があまり寄せられず、これが研究用図書とりわけ学部図書館における洋書資料の購入増加に結びつかない原因の一つとなっており、実際には教員研究用の図書が購入されているにも関わらず図書館の蔵書構成には何らその結果

が反映されず、また、学生等の一般利用者からはその存在自体も見えない状況となっている。このことは、図書館運営上の問題点であり、何らかの形で図書館資料として把握されるような対策を講じなければならない。

視聴覚資料が少ない問題については、本学ではこれまで視聴覚施設を図書館のなかに整備できずにきたという経緯があり、視聴覚設備および資料の体系的な整備が見過ごされてきたのは事実であって、この点の改善は図書館の重要課題の一つである。

b. 予算制度

図書購入のための予算制度については、平成9年度に制度改正がなされた。従来は学部等に一定の積算方式による教育・研究用の予算がグロスで配分され、このなかに図書予算も含まれ、その配分と運用も学部等の管理の下で行われてきた。その結果、実験系の学部と理論系の学部との間で図書費の格差が増大し、必要最小限の学術雑誌しか購入できない学部がある一方で、年度末に予算消化のために発注を集中させる学部もあった。また、学部の都合により教員研究用の予算比率が高くなり、相対的に学生教育用の予算が減少し、さらに特定分野の図書購入に偏るほか、基本図書の欠落、全集・叢書の欠本など図書館全体としての蔵書構成に悪影響が現れていた。

そこで、これらの改善策として、申請制による図書館集中型の予算制度に変更が行われた。この新しい予算制度の実施により、図書予算は学部等の申請により教員研究用・院生教育用・学生教育用の目的別に編成したうえで、研究用図書は学部等の主導による選書・収集を行い、学生・院生教育用および基本図書の収集は図書館の主導によって行うことができ、全体として中央図書館の集中管理体制を原則とする図書資料の共有化と効率化を図ることができるようになった。

上記の予算制度の変更により、従来から問題であった選書システムも大幅に改善された。まず、学術雑誌は近年の価格高騰により継続タイトル数を減少せざるをえない状況のもとで、その重複購入の調整が可能になった。また、新刊書の購入も図書館の主導において、毎週発行される出版情報で選書したうえで、選書の精度を高めるため現物の中身を確認してから発注する方法のほか、大手書店に赴き、現物をみてそのまま購入する方式も試みている。さらにシラバスに掲載された授業に直結した図書を早期に納品するため、学部の協力を得てシラバスの原稿段階でのリスト提出の方策も講じている。資格試験・就職関係図書のコーナーの新設とその充実にも努めている。

このように予算制度の変更により、本学図書館の最優先課題である学生教育用図書の充実に向けての取り組みは、すでにその成果が出ているものと考えている。

(3) 図書館施設の整備について

ア. 現状の説明と点検・評価

a. 施設面積

中央館は面積のうえでは同規模の私大平均とほぼ同程度であるが、建物が8階建ての多層構造であるところから、書庫が積層式書庫となって利用上いちじるしく不便であるほか、

図書館の多様な利用方法に難点がある。また、建築後 30 年を経て、床面・便所・空調設備・電力容量などの面で問題が山積し、近い将来新図書館建設という構想が必要になってくるのは必至である。

図書の収容能力は、中央館で 148 万冊に達するが、機能面ではほぼ飽和状態である。書庫スペースは、私大平均を上回っているのであるが、これには臨時的な保存書庫も計算上含まれているため、図書館としての十分な機能をもった書庫の確保という点では問題がある。

現状は中央館書庫に収納できているのは約 80 万冊で、その他はキャンパス内の別建物に配架されているため、図書の貸出しなどに不便であるばかりでなく、適切な環境のもとで保存されていない点は大きな課題である。その一方で、閲覧スペースが私大平均よりも依然として少ないのも問題であり、図書館の建物を巡る課題は山積している。

各学部の図書館のうちでも農学部図書館は面積が特に狭く、円滑な図書館運営に支障があり、その拡張または増築が望まれる。また、東広島市の工学部図書館は呉キャンパスの移転統合までの間の臨時的な図書室となっており、キャンパスの統合を機に新図書館の建設が計画されている。その他の図書館においては、充分とはいえないが現在切迫した状況には至っていない。

b. 閲覧座席数

閲覧室の座席数の問題については、中央館は、平成 9 年に隣接する旧文芸学部校舎の活用により拡張整備したので、座席数もかなり増加した。しかし、新規に個人用キャレルを導入し、学習環境が向上した反面、面積あたりの座席数が減少し、また増設した閲覧室に学生用開架書架を増設したため、閲覧スペースの拡張につとめたものの座席数が増えていない。

質的向上と量的拡大のいずれを優先するかの問題であるが、実際の利用状況からみれば日常の学生の利用には支障が生じていない。しかし、在籍学生数に対する閲覧席の比率が別表⑦に見られるとおり、6%というのはいかにも少なく今後の改善課題である。他の学部図書館における比率は、医学部が 16% 農学部が 8% 生物理工学部が 12% 工学部が 14% 九州工学部が 10%という状況である。特に農学部は図書館施設そのものの面積が狭隘であり、上記で指摘したとおり改善に向けた対応が迫られている。

イ. 長 所

上記のとおり図書館の建物については、抜本的な改善に待つしかない状況であるが、それでも現状のなかで、工夫と発想の転換により、さまざまな取り組みを行っている。その一つは自学自習室の設置、第二は開架書庫への学生の入室の実施、第三は教員研究個室の開設である。

a. 自学自習室（自由閲覧室）

中央館の 6 階部分は建物の構造上、半ば独立した形であるところから、これを活用して夜遅くまで学内で自由に学習・研究のできる場所をつくるため自由閲覧室とした。

座席数は 200 席、配置している図書は、退職教員の個人研究費の返却図書および寄贈された図書のうち、学生の学習・教育に役立つ辞書・参考図書・ハンドブック、その他専門分野の基礎的図書などである。

授業の始まる前の午前 8 時から夜 10 時まで、空調機が稼働し、しかも、年末年始と夏期休

暇中の1週間は休館とするが、それ以外は日曜・祝日も開館している。昨年度は年間348日を開館している。学生のほか卒業生や一般社会人にも利用を認めている。利用者の数は常時80人位で1日500人くらいが入室して勉学に励んでいる。職員の配置はしておらず、利用者各自の自主管理にゆだねている。試験期を除く平常では、利用者の相互協力のもと、全く静かで快適な学習環境が保たれていて他に類をみない施設である。

b. 閉架書庫への学生入室の実施

中央館は昭和45年の建設で、当時敷地の関係で8階建ての図書館となったため、図書の開架スペースが広くとれないところから、図書のほとんどは閉架書庫に収納することになった。そのため、開架図書が少なく利用者からの不満もあった。そこで、平成11年から発想を転換し、閉架書庫を大幅に整備するとともに問題点の改善を行ったうえで、ここに収納する約50万冊の所蔵図書すべてを学生が直接閲覧できるように書庫への入室を認めることにした。

これにより、学生利用者は自己の関連分野あるいは関心のあるさまざまな幅広い領域について学習や調査・研究を自発的に進められることになり、勉学意欲の向上とその成果が大いに期待できる。

c. 教員研究個室

中央館では館内施設のうち、旧文芸学部校舎のあとの未改装部分を有効利用して、旧教員研究室の一部を教員研究個室に転用し、1週間を限度として1日単位で閲覧室を兼ねた研究個室を貸し出すことにしている。若手の研究者が徹夜で論文を書く場合とか、図書館資料を使用しての研究、あるいは非常勤講師の講義の準備や研究に利用されて、教員から歓迎されて有効に運用されている。

研究室の使用時間は特に制限なく、研究机、テーブルセット、パソコン端末、内線電話、洗面器など研究室としての必要な設備を備えており、貸出中は部屋の鍵を本人に渡している。現在は1室であるが、利用者が多いので増設する予定である。

ウ. 問題点と改善方策

a. 図書館の改善策

図書館施設における現在の問題点は、さきに説明したとおり、保存スペースの分散化と閲覧席の不足であり、そのほとんどは建物自体の構造と老朽化からくる問題であって、基本的には抜本的な大改修または新図書館の建設という課題につきるといえる。改修については平成9年から図書館の改装整備事業を4年計画で実行中であるが、建物内部の設備等の改修に関しては、本年大学当局に積層閉架書庫の改修、空調機の更新、電力容量の拡張、便所の改修等を要請しており、年次的に実施される見込みである。さらに、本年計画中の8階未改修フロアの書庫化実現がなによりも緊要の課題である。一方、閲覧スペースも日常の利用については支障がないとしても試験期には絶対的に不足する現況において、直ちに新図書館の建築計画に具体性がない以上、現在の10号館旧文芸校舎11階フロアの図書館自習室への転換が最も手近な改善方策と考えている。

中央館では理工分室および薬学分室が狭隘な状況であり、その拡張が不可能なため、新図書

館の新築が難しいとすれば、かねてより構想のある自然科学系情報センターの計画・実現を改めて議論していく必要もあると考えている。農学部図書館は拡張または新築の問題は避けて通れない切迫した状況であり、この対応は重要課題である。東広島キャンパスの工学部図書館は先に触れたように呉キャンパスとの統合を機に新図書館の建設が予定されている。

b. 視聴覚施設

視聴覚施設については、視聴覚資料と同じく、本学ではこれまで図書館に視聴覚設備を整備することを怠ってきたが、昨今では視聴覚教材の体系的な整備と有効な視聴覚機器の整備が望まれるところであり、そのことから学内で検討した結果、図書館内には必要なスペースがないため、独自の施設・設備が整備できないので、語学センター内に完備したAV施設をさらに強化のうえで図書館と共同利用の形で有効活用することになった。

語学センターのAV設備に新しい電子情報媒体対応の機器を付加すれば、語学教材用に加えて学術情報全般の視聴覚資料が扱える環境が整うものと考え、今後、この方面の充実が本図書館にとっては重要な課題となる。将来図書館と語学センターとの統合を図り、一つのメディアセンターとしての機能が構築されることを期待している。他の図書館における視聴覚サービスは、広島工学部を除いて実施しており、ブースも平均4台で、それぞれ館内のコーナーで運用しているが、さらなる充実が望まれ今後の改善課題である。

(4) 利用者サービスの状況について

ア. 現状の説明と点検・評価

a. 開館日数および開館時間

年間の開館日数は、昨年中央館と医学部が279日、他の学部図書館は266日であった。中央館の279日の日数は平均をかなり超えており、本年からは通信教育のスクーリングに対応するため、さらに増加することになる。他の図書館は学部の性格上現状のままとするのはやむをえないと思われる。(別表⑧参照)

通常日の閉館時刻は、別表⑧のとおり中央館は午後8時半、医学部・農学部・工学部・九州工学部は午後7時、生物理工学部は6時である。中央館の自由閲覧室は図書の貸出はないものの、午後10時まで開館しているので、二部夜間の授業があっても特に勉学上の支障はない。夜間遅くまで開館するよりも、職員の負担を日曜開館担当にシフトした方がよいと考えられる。

土曜日の閉館時刻は、中央館は平常とおなじ8時半、医学部は4時、他は1時までとなっている。日曜開館は中央館では試験期および通信教育スクーリング期に、農学部でも部分的に実施している。昨年は中央館は11日であったが、本年は日曜と休暇中に開館する日がさらに11日増加する予定である。

b. 奉仕対象者と貸出状況 (別表⑨参照)

中央館の奉仕対象者36,000人、貸出者数60,000人、貸出冊数121,000冊、一人当たり貸出冊数2.0冊。医学部を除く各学部平均の奉仕対象者2,600人、貸出者数6,300人、貸出冊数13,200冊、一人当たり貸出冊数2.1冊。医学部の奉仕者3,500人、貸出者数3,800人、貸出冊数5,600冊、一人当たり貸出冊数1.5冊。

中央館の年間開館日数は前年より 8 日増え、また開館時間の拡張によって、通信教育の学生にも閲覧利用がしやすい環境となっており、貸出者数、貸出冊数がともに増数となっているのは評価できる。

c. レファレンス・サービス

平成 9 年の図書館改装に伴い、従来やや低調気味であったレファレンス・サービスの充実を図るため、3 階と 4 階にそれぞれレファレンス専用カウンターを設けた。3 階には相互協力を兼務する担当者と、4 階には専任の担当者を配置し、学生の利用指導から高度な参考質問まで幅広く対処できる体制が固まり利用者から高い評価を受けるようになった。しかし、今後さらに広範な専門分野に関するレファレンス・サービスを行うためには、現有スタッフ以外に、資質の高い職員の補強が必要である。

レファレンス担当職員として、中央館ではレファレンス専任が 1 名、相互協力との兼務者が 3 名いる。他の図書館では兼務者が 2 名これに当たっている。レファレンスの受付件数は各図書館におけるカウンターの取扱基準に振幅があるため、正確な数字は捉えられないが、取扱基準の標準化を図りたいと考えている。

d. 利用者教育

各図書館とも、学生の入学時の図書館オリエンテーションのほか、適宜に図書館館内ツアーおよび検索端末講習会を実施している。端末講習会は学生、教職員などを対象に図書館資料の基本的な検索方法からより高度な検索方法までそれぞれのレベルと目的別に指導している。

中央館では本年館内利用案内ビデオを作成し、オリエンテーションの際に有効に活用した。

また、図書館利用をサポートするため、館内の各部門の職員で横断的なメンバーによる利用者教育ワーキンググループを編成し、上記の講習会、各種利用案内の印刷物作成、ホームページの作成・更新など多岐にわたった活動を行っている。

e. 司書課程および情報処理教育への参画

利用者教育に関連して、図書館が司書課程および情報処理教育に協力している。本学には学部・短大と通信教育部に司書課程を開設しているが、従来は通信教育部の「図書館実習」を受け入れていた程度で必ずしもこれに積極的に参画していたとはいえない状況であった。図書館の改装整備も一応整ったのを機会に、また、司書課程のカリキュラムの改正に伴い、通信教育部および学部・短大の情報検索演習等の授業を補佐するため、昨年は 8 回の授業に延べ 26 名の職員がサポートし、なかには図書館の施設と端末機器を使用して行ったこともある。

f. 図書館職員の状況

中央館では専従職員 43 名、非常勤職員 21 名、学部図書館では合計で専従職員 25 名、非常勤職員 40 名、全体で専従職員 68 名、非常勤職員 35 名、合計で 103 名である。これは同規模私大の平均数と同じであるが、学部図書館を含めた全体では約 20 名程度少ない。専従者の司書の数は中央館および学部図書館とも 1/2 であるが、非常勤職員の中での司書は 35 名中 11 名で 1/3 程度といえる。中央館では職員のほかに、人材派遣会社から 4 名の派遣職員を受入れており、整理部門に 2 名、貸出カウンターに 2 名を配置している。今後の状況としては専従職員の増強は望めないところから、必要部門に応じた専門知識のある人材派遣職員による補充が行われる見

通しである。

イ. 長 所

a. 自学自習室と閉架書庫への学生の入室

図書館施設の項で説明したが、この二つの対応は、図書館の利用者サービスのうえから、きわめて有効な措置であった。二つとも本図書館の構造上の難点を有効に活用または運用するもので、利用時間の延長（夜 10 時まで）、日曜開館の実施（年間 348 日の開館）を可能にした。また、開架図書の拡大に加えて、膨大な蔵書資料の直接閲覧など利用者サービスのうえで閉架書庫への学生の入室利用の実現は画期的な措置であったと高く評価している。

b. 図書館の一般公開

中央館では開かれた大学の一貫として、また地域住民の生涯学習への支援サービスとして平成 11 年後半から図書館の一般公開を行っている。利用対象者は従来の公共図書館からの紹介によるほか、中央館に近隣する東大阪市および八尾市の住民、本学が開催する公開講座の受講者や本学園に在籍する学生・生徒の父母にも拡大している。現在の登録者数は 487 名である。また、夏期休暇中の図書館の閲覧利用に余裕のある期間に限定して近隣の高校生にも図書館を開放している。

学部図書館の中では、九州工学部において、平成 9 年から筑豊地方を中心とする周辺地域の貴重な学術文化に関する資料を広くかつ系統的に収集整理し、学内外の利用者の閲覧に供するため、地域資料室を設置している。11 年度は 735 人の登録者があり、444 点の貸出があつて、関係各方面から高い評価を受けている。

ウ. 問題点と改善方策

a. 利用者サービス

たびたび述べるように、本学中央館は建物の構造上、利用者にはきわめて使いづらい図書館であるが、さまざまな工夫により、また必ずしも伝統的な図書館学を中心とした運営にとらわれない発想の転換によって、利用しやすい図書館、入りやすい図書館、図書館にいけば何かいいことがあつたと思われるような親しみやすい図書館づくりを目指している。

b. アンケート調査

利用者サービスを重視した図書館を運営するためには、利用者の要望や意見を大切にする姿勢がその前提になければならないと考え、中央図書館では 2 年に一度、図書館利用者に対するアンケート調査を実施している。これはいわゆる「学生による授業評価」と同じように「学生による図書館評価」として、本館・他の公共図書館の利用状況、選書対象図書、蔵書の配架内容、開館時間、施設設備、端末機の利用方法、レファレンス・サービス、広報・案内表示、職員の対応などについてアンケートを求め、これらを集計・分析したうえ図書館運営の重要な改善資料としている。

アンケート結果をもとに、館内で対応を協議し、学長、学部長、その他関係部門にも報告して改善を図るための協力を要請している。また、このアンケート結果とこれについての図書館

側の対応も回答し、館内に掲示・公表している。これは利用者サービスを主眼とした図書館運営を行ううえで有効かつ適切な手段の一つとして評価している。

c. 情報処理教育への参画

図書館において利用相談を受けて痛感されることは、社会をとりまく情報環境の激しい変化の一方で、いかに文献や資料の探索、情報収集等の基本的な能力が身についていない学生が多いかという点である。これは学生自らが学習、研究を進めるうえでも、即戦力を求められる現在の厳しい就職戦線においても、大きなハンデキャップを背負い込むことにほかならない。そのような状況のもとで、大学としても全学的な重要課題として取り組むため、平成13年から新しく情報処理教育棟を建設し、ここを拠点として全学生を対象にした初歩教育コースの情報処理教育を実施することになった。この全学統一カリキュラムのなかに、図書館情報教育を1コマないし2コマ組み入れるよう要請している。これが実現すれば図書館職員も積極的に教務補助として協力することになる。

さらに、図書館情報リテラシー教育に図書館として参画、支援することが重要であるとの認識から、司書課程と図書館が中心になって2単位相当の自由講座の開設も計画しているが、これは平成14年以降に実施したい。

(5) 学術情報の処理・提供システムおよび他大学との協力について

学術情報の処理・提供システムの整備状況については、中央図書館および各図書館の報告書の中で詳しく説明しているが、その概要を以下にまとめる。

(5)-1. 図書館システム

ア. 現状の説明

本学図書館における図書館システムの導入経過は、中央館は昭和55年から図書資料のデータ蓄積を開始し、平成元年館内開発による貸出・返却システムを稼働させ、平成5年から総合図書館情報システム「DOBIS」を導入し、11年3月同機の更新をした。また、平成10年から年次計画により図書約48万件の遡及入力作業が進行している。現在この「DOBIS」システムのもとで図書検索システムの「KISS」、雑誌システムの「KISS-2」および業務用の収集・整理システムにより、利用者サービスと図書館業務の全般を運用している。

各学部図書館においては、医学部だけが電算化について未達成であるが、その他の学部においては、それぞれ個別の図書館システムが稼働しており、農学部では平成11年に「CALIS」、生物理工学部では平成6年に「NewLib」、工学部では昭和58年にオフコンを用いた貸出・検索システムを導入以後二度の機種変更を経て平成8年に「LIBSERIA」、九州工学部では平成7年に「LIMEDIO」のシステムがそれぞれ採用され、利用者サービスと図書館業務の全般を運用している。

イ. 点検・評価

中央館における現行の図書館システム「DOBIS」は、汎用機を用いたシステムで、導入以来安定した稼働がなされており、機械的トラブルで一時停止したことはあるが、システムダウンを経験していない。インターネット対応のためのゲートウェイサーバーを利用した新検索シ

システムの開発により、インターネット環境にも対応したオープンシステムとなっている。

医学部を除く各学部図書館でのシステム運用は、各図書館での運用となっているが、いずれの図書館でも大きなトラブルもなく安定した稼働実績があり、利用者からも好評を得ている。

ウ. 長所と問題点

中央館のシステムは大型コンピュータを前提にしたシステムであり、稼働は安定しておりセキュリティの面でも安心できるシステムといえる。ただし、大型コンピュータを扱う必要があり電算機に熟知した館員が必要な点と、誰でもが簡単に扱えるシステムではない点が問題といえる。現在でも限られた館員により基幹システムが管理されており、今後の人員確保の面で問題点となっている。

各学部図書館の採用しているシステムは、現行システムの中でもかなり評価の高いシステムが採用されており、その運用についても館員レベルで十分対応できるシステムであり、実際の運用面でも館員、利用者双方から高く評価されているのは長所といえる。

エ. 改善方策

中央館では現在安定した運用がなされているが、システム自体は約 30 年前に開発されたシステムであり、現行の他のシステムと比較すると、ランニングコストの高さやメンテナンスの面で旧態依然としたところがあり、インターネット環境に対して柔軟な対応ができないことから、次期システムへのリプレースを検討すべき時期に来ているといえる。現行システムがスムーズに移行可能なシステムの採用についての検討を考えている。

学部図書館のなかで、現在唯一電算化がなされていない医学部図書館については、早急に電算化を進めるべく、医学部図書館の館員を中心にシステム選考に入っており、近く実現される見通しである。

(5)-2. 学術情報センターシステム

ア. 現状の説明

中央館では学術情報センターへ平成 5 年 1 月に接続し、NACSIS-CATを利用した業務体制へ移行し、平成 8 年 4 月からはNACSIS-ILLにも参加し、利用者サービスの向上と他大学図書館との相互協力に対処している。

工学部図書館では平成 3 年に、生物理工学部では平成 6 年に、九州工学部では平成 7 年に、農学部では平成 11 年 5 月に、それぞれ学術情報センターシステムとの接続を完了し、利用者サービスの向上と他大学図書館との相互協力に対処している。

イ. 点検・評価

中央館・各分館ともにNACSIS-CATの利用に伴い、同システムへのオンラインによる書誌登録、所蔵登録を通じて総合目録形成に貢献しており、またNACSIS-ILLの利用によって相互協力への迅速な対応が可能となっており、現在未接続である医学部図書館の早急なシステム立ち上げの実現により大学全体としての学術情報センターシステムの利用体制をめざしている。

ウ. 長所と改善方策

学術情報センターへの接続を完了した館では、業務効率の向上がみられ、特にNACSIS-I L Lの利用による相互協力業務の迅速化は利用者から高く評価されており、今後とも質的な向上を目指して業務改善に向けて努力を重ねていくつもりである。

(5)-3. 他大学等との協力

ア. 現状の説明

中央館での他大学図書館等との相互協力は、かなり以前から積極的に行われており、別表⑩のとおり、昨年度の図書の貸出冊数 557 冊、借受冊数 620 冊、文献の複写受付 2,827 件、依頼件数 4,285 件という数字は他の私大平均に比べても件数が多く、利用者間でのサービスが定着している表れといえる。

各学部図書館における相互協力の状況も、九州工学部図書館での利用件数が低いことを除けば各図書館とも利用件数は多く、特にNACSIS-I L Lの利用開始に伴い利用件数が伸びている。

イ. 点検・評価

中央館・各学部図書館ともに、私立大学図書館協会各地区協議会の会員校あるいは役員校として積極的に活動し、別に館種を越えて、中央館では日本薬学図書館協議会・専門図書館協議会・法律図書館連絡会にも加盟しており、医学部図書館は医学図書館協議会、農学部図書館は農学図書館協議会にそれぞれ加盟して活動をしている。これらの各協議会との連携とも相まって相互協力体制は全国的な展開がなされており、自館の所蔵資料のみにとどまらず、広く全国の図書館が所蔵する資料を含めた多方面にわたる他館との相互利用が活発となっており、この方向は今後ともさらに強まるものと考えられる。

ウ. 問題点と今後の改善方策

相互協力体制の確立にともない、今後は外国雑誌の共同購入や図書資料の分担保存についての検討が必要になると思われる。これは外国雑誌の高騰に端を発して中央館・各学部図書館とも購入雑誌について検討をすすめていく過程において、今後検討を要する事項として共通認識がなされている問題であり、各図書館での利用形態を勘案しながら、資料購入・保存との関連で、本学図書館のみならず他大学図書館とも、この点での相互協力体制の見直しが必要となっていくと思われる。

中央図書館・各学部概況(平成12年5月1日現在)

①蔵書冊数(冊)

区 分	中央館	農学部	医学部	生物理工	工学部	九州工学部	大学全体
和書	594,859	58,648	53,071	33,182	131,298	74,374	945,432
洋書	591,776	32,758	90,137	11,430	38,780	31,091	795,972
計	1,186,635	91,406	143,208	44,612	170,078	105,465	1,741,404

②年間受入図書冊数(平成11年度)

区 分	中央館	農学部	医学部	生物理工	工学部	九州工学部	大学全体
和書	24,182	1,112	1,752	2,088	2,416	1,887	33,437
洋書	7,990	743	1,396	791	724	798	12,442
計	32,172	1,855	3,148	2,879	3,140	2,685	45,879

③学術雑誌所蔵種類数(種)

区 分	中央館	農学部	医学部	生物理工	工学部	九州工学部	大学全体
和雑誌	4,753	906	1,101	282	588	566	8,196
洋雑誌	6,144	550	1,626	220	509	530	9,579
計	10,897	1,456	2,727	502	1,097	1,096	17,775

④学術雑誌年間受入種類数(平成11年度)

区 分	中央館	農学部	医学部	生物理工	工学部	九州工学部	大学全体
和雑誌	1,460	763	537	228	303	141	3,432
洋雑誌	1,601	238	440	156	206	168	2,809
計	3,061	1,001	977	384	509	309	6,241

⑤視聴覚資料等所蔵数(点数)

区 分	中央館	農学部	医学部	生物理工	工学部	九州工学部	大学全体
視聴覚資料	25,344	106	535	302	585	1,236	28,108
電子出版物	116	10	30	75	19	4	254

⑥資料費(千円)

区 分	中央館	農学部	医学部	生物理工	工学部	九州工学部	大学全体
資料費	416,795	42,052	84,371	48,323	42,244	63,841	697,626

⑦施設の概要

	中央館	農学部	医学部	生物理工	工学部	九州工学部	大学全体
面積	12,361㎡	918㎡	2,424㎡	1,263㎡	2,594㎡	2,826㎡	20,774㎡
収容冊数	1,480千冊	107千冊	165千冊	90千冊	268千冊	170千冊	2,104千冊
座席数	1,437席	196席	165席	235席	352席	189席	2,354席
閲覧席比率	6%	8%	16%	12%	14%	10%	7%

(閲覧席比率は対在学生)

⑧開館日数・時間

区 分	中央館	農学部	医学部	生物理工	工学部	九州工学部
開館日数	279	266	279	268	260	266
時間(平日)	9:00~20:30	9:00~19:00	9:00~19:00	9:30~18:00	9:00~19:00	9:00~19:00
時間(土曜)	9:00~20:30	9:00~13:00	9:00~16:00	9:30~13:00	9:00~13:00	9:00~13:00

⑨奉仕対象者・貸出者数・貸出冊数

区 分	中央館	農学部	医学部	生物理工	工学部	九州工学部	大学全体
対象者	36,169人	2,653人	3,443人	2,109人	2,686人	2,934人	49,994人
貸出者数	60,335人	7,960人	3,746人	7,630人	2,940人	6,426人	89,037人
貸出冊数	120,940冊	13,504冊	5,605冊	14,996冊	10,472冊	13,705冊	179,228冊
一人当たり	2.0冊	1.7冊	1.5冊	2.0冊	3.6冊	2.1冊	2.0冊

⑩相互協力の状況

区 分	中央館	農学部	医学部	生物理工	工学部	九州工学部	大学全体
図書貸出	557冊	5冊	6冊	0冊	26冊	19冊	613冊
図書借受	620冊	10冊	18冊	20冊	65冊	17冊	750冊
複写受付	2,827件	499件	2,759件	187件	427件	106件	6,805件
複写依頼	4,285件	1,509件	3,413件	1,658件	438件	198件	15,786件